

Super (1980)の時間的重要性と感情的関与 —ライフ・キャリアレインボーの二次元モデルの可視化と 批判的継承—

法政大学キャリアデザイン学部 教授 田澤 実

1 導入：方法論的価値と限界

Super (1980) は、キャリアを「人が生涯を通じて担う役割の連鎖と組み合わせ」として概念化し、ライフ・キャリアレインボーという視覚化手法を提示した。この手法は、役割への投資 (investment) を時間的側面 (帯の幅) と感情的側面 (帯の色の濃淡) の二次元で表現しようとした点に独自の価値がある。本稿では、Super (1980) が例示的に提示した二つの対照的パターンである「献身的な法廷弁護士」と「低関与的な流れ作業型の労働者」¹⁾ に焦点を当て、その方法論的意義と限界を検討する。

重要なのは、この2つの事例は個々の労働者を分類するためのラベルではなく、感情的関与の差異を説明するための象徴的・概念的な例示にすぎない点である。また、この差異は個人の性格や能力によって生じるものではなく、労働条件・職務設計・裁量の有無といった構造的要因に強く依存する。本稿では、こうした視点を踏まえて、Super (1980) の事例を現代の労働環境に照らして再解釈し、その視覚化手法の今日的意義を明らかにする。具体的には、以下の批判的視点を持って再解釈する。

- ・ **構造的要因の明示化**：感情的コミットメントの差異は、個人の性格や能力ではなく、労働

条件と職務特性の構造的差異に起因する

- ・ **二項対立の相対化**：極端な対比は分析的明瞭さを提供するが、現実の多様性を捨象するリスクがある
- ・ **価値中立的記述**：いずれのパターンにも利点と欠点があり、「良い人生」の基準は個人の価値観に依存する
- ・ **時代的文脈の限定性**：1980年当時の労働環境を反映しており、現代への適用には慎重さが必要

これらの視点を踏まえ、Super の視覚化手法の方法論的価値を評価しつつ、事例の解釈については現代的な再検討を行う。

2 ライフ・キャリアレインボーの理論的枠組み

(1) キャリア

Super (1980) は、キャリアが、特定の職業と同義ではなく、生涯を通じて個人が演じる役割の連鎖と組み合わせであると述べた。そして、個人は人生の過程で、以下の9つの主要な役割を演じるとした。

- ・ 子ども (Child)
- ・ 児童・生徒・学生 (Student)

- ・余暇人 (Leisurite) ²⁾
- ・市民 (Citizen)
- ・労働者 (Worker)
- ・配偶者 (Spouse)
- ・家事担当者 (Homemaker)
- ・親 (Parent)
- ・年金生活者 (Pensioner)

(2) ライフ・スタイル、ライフ・サイクル、キャリア・パターン

Super (1980) は、人生の様々な役割が同時に組み合わさっている状態が「ライフ・スタイル (life-style)」を成し、様々な役割が時間の流れの中で順に組み合わさっていくことが「ライフ・スペース (life space)」を形づくり、「ライフ・サイクル (life cycle)」を構成するとした。そして、それらを統合した全体像を「キャリア・パターン (career pattern)」と呼んだ。

たとえば、Super (1980) は、22歳で大学を卒業し就職した人物の事例において、この人物が児童・生徒・学生の役割を終えて労働者の役割に入ると同時に、20代半ばで配偶者、家事担当者、親という家庭内の役割を追加していることを示した。この事例は、単一の労働者としてのキャリアではなく、多様な役割の同時的な組合せ (ライフ・スタイル) がキャリアを構成していることを明確にするものであった。

(3) 時間的重要性と感情的関与

Super (1980) は、各役割の重要性は時間的な観点と情緒的な観点から操作的に定義することができるとした。前者は時間的重要性 (Temporal importance) であり、役割を果たすために必要な時間の量とした。後者は感情的関与 (Emotional involvement) であり、役割への心理的コミットメントの深さとした。

興味深いのは、Super (1980) が時間的重要性についてライフ・キャリアレインボーにおける各役割の帯の幅 (太さ) で示すことができたのに対し、感情的関与について「もし図1 (筆者注：ラ

イフ・キャリアレインボーを指す) がカラーであれば、感情的関与は役割帯の色の濃淡によって示すことができたであろう (p.290)」と述べるにとどまり、実際には色の濃淡としてライフ・キャリアレインボー上に示しきれていない点である。たとえば、Super (1980) は、子ども (Child) 役割について、幼児期の強い依存や青年期の役割葛藤の時期は「濃い緑」、親から精神的に独立している時期は「薄い緑」になり、さらに後年、年離れた親の問題を助けることに関与するようになると「再び一時的に濃い緑になる」と説明した。また、労働者 (Worker) 役割について、献身的な法廷弁護士の場合は「最初はかなり濃い青で始まり、キャリアのピーク時にはさらに濃くなり、引退に向けて徐々に薄くなる」と説明し、低関与的な流れ作業型の労働者の場合は「一定して薄い青」と説明した。しかし、その他の7つの役割については具体的な言及は見られない。

3 時間的重要性と感情的関与による役割パターン分類

(1) 役割パターンの4類型

Super (1980) によれば、仕事役割は人生を構造化し、意味を与える。しかし、この「意味」が実現されるかどうかは、時間的重要性 (各役割の幅) だけでなく、感情的関与 (各役割の色の濃さ) の両方に依存する。これは単に時間を費やすだけでは、仕事が人生に意味を与えるとは限らないということである。

時間的重要性と感情的関与の組み合わせを考慮すれば、4つの典型的な役割パターンを抽出できるであろう。この4象限による類型化は、Super (1980) が明示的に提示したのではなく、Super の時間的重要性と感情的関与という二次元概念を論理的に組み合わせることで、本稿が独自に導出した分析枠組みである。この類型により、役割の重要性が単なる時間の量ではなく、その役割を通じて自己をどれだけ表現しているかという多次元の視点から評価されるべきであることが鮮

明となる。

類型 1：時間的重要性と感情的関与がともに高いパターン

Super (1980) は、ライフ・キャリアレインボーが示すものについて、その人物がどこに、どのように時間、エネルギー、そして自己を投資してきたかを明確に示すものだとしている。

時間的重要性と感情的関与がともに高い役割は、個人の時間、エネルギー、そして自己の投資が最も集中している状態を示す。役割は新しい重要性を帯びており、心理的な関与が非常に強い。この役割を通じて自己実現を追求している可能性が高く、役割の実行によって、高い達成感や成功を伴うことが多い。しかし、この役割に長い時間をかけること、高い感情的コミットメントをすることは他の役割を果たすことを困難にし、役割葛藤を引き起こす可能性が最も高い。

たとえば、献身的な法廷弁護士のライフ・キャリアレインボーでは、キャリア絶頂期において、労働者役割の幅が太くなり、さらに濃い色になる。他の役割（配偶者、親、余暇人）が時間的にも感情的にも圧迫される。

類型 2：時間的重要性が高いが感情的関与が低いパターン

時間的重要性が高いが感情的関与が低い役割は、個人が形式的または非形式的に多くの時間を費やしているにもかかわらず、その役割への心理的関与が低い状態を示す。その役割が挑戦や感情的な重要性を失っている状態、または最初から自己概念との整合性が低く、深い関与が生まれていない状態である。時間は消費されるが、役割の実行による満足は低く、疎外感を伴う可能性が高い。この役割で満足が得られない場合、その不満が他の役割での困難につながる可能性がある。しかし、ただ時間の経過を待つように感じる仕事の場合、他の役割にスピルオーバーする形での競合は生じ

にくいことが考えられる。

たとえば、低関与的な流れ作業型の労働者のライフ・キャリアレインボーでは、週 40 時間の労働時間で労働者役割の幅が太いにもかかわらず、一定の薄い色のままとなる。

類型 3：時間的重要性が低いが感情的関与が高いパターン

時間的重要性が低い感情的関与が高い役割は、費やす時間は比較的少ないものの、その役割が個人のアイデンティティや感情にとって非常に重要である状態を示す。その役割は、人生に意味を与えたり、特定の価値や興味の出口を提供したりしており、物理的な時間は少なくとも、関与する活動の全範囲において高い満足を伴う。時間的な競合は少ないため、他の役割との物理的な圧迫は小さいが、感情的なエネルギーはこの役割に集中している可能性がある。

たとえば、趣味や余暇の活動が短い時間であっても、自己概念と強く結びついている場合、週末の数時間の音楽活動や創作活動が、その人のアイデンティティの核心を成している。この場合、ライフ・キャリアレインボーの余暇人の役割の幅が狭くて濃い色となる。

類型 4：時間的重要性と感情的関与がともに低いパターン

時間的重要性と感情的関与がともに低い役割は、時間的にも心理的にも個人の人生の中心ではない状態を示す。役割の遂行は最小限であり、ライフ・スタイルを構成する上での影響は小さく、形式的な義務は果たされているが、役割の実行による満足は期待されず、役割の形成も積極的に行われぬ。この役割は、個人のライフ・スペースの大部分を占めず、他の主要な役割に資源が集中している可能性がある。

たとえば、選挙に行くなどの最低限の行為しか行わず、地域活動に深く関与しない場合、ライフ・

キャリアレインボーの市民の役割の幅が狭くて薄い色となる。

この4象限の分類は以下のような重要な理論的洞察を示す。

- ・多くの時間を費やし、感情的関与があれば、充実感をもたらすが、他の役割を圧迫するリスクが最も高い（類型1）
- ・多くの時間を費やしても、感情的関与がなければ、その役割は人生に意味をもたらさない（類型2）
- ・少ない時間でも、深い感情的関与があれば、役割は自己実現に貢献しうる（類型3）
- ・健全なライフ・スタイルは、類型1（中核的役割）、類型3（補完的役割）、類型4（周辺の役割）の適切な組み合わせによって構成される

（2）分析の視点

以上の理論的文脈を踏まえ、本稿では以下の視点で二つの事例を再検討する。

- ・理論的意図の尊重：時間的重要性と感情的関与で示そうとした方法論的革新性を評価する
- ・構造的要因の把握：個人属性ではなく、労働条件の差異として理解する
- ・価値中立性：どちらのパターンも正当な選択であり、それぞれに利点と欠点があることを示す
- ・多様性の承認：理念型であることを明示し、現実の個人の多様性を尊重する

4 事例の比較

以降では、献身的な法廷弁護士と低関与的な流れ作業型の労働者という2つの事例を比較する。なお、Super（1980）は労働者役割の変化を青色の濃淡で表現できることを示しているが、具体的な年齢設定や各役割の詳細な推移までは提示して

いない。そこで本稿では、Super（1980）の理論的枠組みを視覚化することを目的として、筆者が仮想的な具体例として年齢設定および各役割の推移を構成した。

また、以下の図式化では、ライフ・キャリアレインボーに見られる半円形（虹型）の配置ではなく、縦軸に役割、横軸に年齢を置き、各役割を水平の帯として並べる形式を採用する。これはSuper（1980）における水平の帯を使った図（Major roles in a life career）を参照したものである。この配置では各役割が独立したレーン（行）を持つため、他の役割の帯を描く際に干渉されにくく、各時点における帯の幅（時間的重要性の増減）を自由に変化させやすい。さらに、色の濃淡によって感情的関与の変化も表現しやすいという利点がある。

（1）献身的な法廷弁護士

①事例の概要

献身的な法廷弁護士のライフ・キャリアレインボーを図1に示す。本事例は、自律性が高く、スキル活用機会が豊富で、社会的意義が明確な専門職における典型的キャリア・パターンを示す。Super（1980）は「献身的な法廷弁護士」³⁾を象徴例として提示したが、同様のパターンは研究者、医師、建築家、教師など、多くの専門職においても観察されうる。ここで示す推移はあくまで理念型であり、実際の専門職従事者の経験は多様である。

②各役割の推移

・子ども（Child）役割

幼少期は親への強い依存と愛着の中で育つ（太く濃い緑）。20代から40代にかけては心理的独立が進み、子ども役割は細く薄くなる。しかし50歳以降、親の加齢に伴う介護という新たな課題が浮上し、子ども役割は再び太く濃くなる。これは、親を支える子としての責任が人生後半で再び意味を持ちうることを示している。60代で親が亡くなり、子ども役割を終える⁴⁾。

・児童・生徒・学生 (Student) 役割

児童期から学業に本格的に取り組み、高校でも優秀な生徒であった。大学の法学部へ進学し、学生としてのアイデンティティが最も強まる（帯は太くなり、濃いオレンジになる）。22歳で法廷弁護士となるための資格を取得し、学生役割を終える。

・余暇人 (Leisurite) 役割

児童期から一定の余暇時間は存在するが、40代では趣味・娯楽に費やす時間はほとんどない（細く薄い紫）。50代後半から徐々に余暇を楽しむようになり、退職後は趣味に没頭する豊かな時間が訪れる（太く濃い紫になる）。

・労働者 (Worker) 役割

22歳から専門職としてのキャリアが始まる。開始当初から仕事への情熱は高く（比較的濃い青：fairly dark blue）、30代に入ると活躍の幅が広がり、40歳前後で時間的重要性と感情的関与が最大となる。この時期の労働者役割は最も太く、最も濃い青で描かれる（さらに濃い青：still darker）。しかし50代以降は仕事のペースが徐々に落ち、役割帯は細く薄くなる（徐々に明るい青：slowly lighter）。65歳で引退する。

・市民 (Citizen) 役割

選挙参加や納税といった基本的義務は果たすが、それ以上の市民活動への関与は限定的である（一貫して細く薄い水色）。

・配偶者 (Spouse) 役割

25歳で結婚し、新婚期は配偶者との時間を大切に（やや太く濃いピンク）。しかし30代以降、仕事の多忙化により配偶者役割は相対的に希薄になる（薄いピンク）。その後、仕事のピークが過ぎ、子どもの成長も進むにつれて関与が戻り（再び太く濃いピンクに）、75歳で配偶者を亡くして役割を終える。

・家事担当者 (Homemaker) 役割

「主婦／主夫」とも訳される役割である。25歳で結婚した当初は配偶者に家事を任せる状態から始まる（細く薄い茶色）。子どもの誕生後は家事に割く時間が増える時期がある（帯は太くなる）が、感情的関与は相対的に低い（色は薄い）。仕事が忙しくなると家事時間はやや減少する（帯は細くなる）一方、家庭の維持に関する重要性は認識される（色がやや濃くなる）。その後、子どもの成長に伴い、さらに細く薄くなっていく。

・親 (Parent) 役割

結婚後しばらくして子どもが生まれ、子育てが始まる時期には、一定の時間をかけて深く関わる（やや濃い赤）。ただし仕事が多忙化すると、家事担当者役割と連動する形で推移し、子どもの成長に伴って細く薄くなっていく。

・年金生活者 (Pensioner) 役割

65歳で引退し、年金生活者としての新しい生活が始まる。当初は引退への戸惑いがあり、細く薄い灰色から始まるが、徐々に引退者としてのアイデンティティが確立され、中程度の太さと濃い灰色へと安定していく。

③構造的要因の分析

このパターンが生じる主な構造的要因には下記が挙げられる。

- ・裁量権が大きく、自己決定の機会が豊富である
- ・長期訓練で獲得した専門知識・技能を日常的に活用できる
- ・依頼人や社会への貢献が可視化されやすい
- ・長時間労働を伴いやすく、時間管理の自律性は限定される
- ・仕事を家庭に持ち帰る、休日も案件を考える等、境界が曖昧になりやすい

④このパターンの特徴

献身的な法廷弁護士の人生には、仕事を通じた深い自己実現という利点がある一方で、家庭生活の圧迫や配偶者への負担といった大きな犠牲が伴うと考えられる。具体的には、以下のように整理できる。

a) 利点 (ポジティブな側面)

・仕事からの「意味」と満足感の獲得

本事例では仕事への感情的関与が非常に強く、図式上は「濃い青色」で表現される。Super (1980) は、仕事役割が生活を構造化し、それに意味を与えることを指摘している。仕事役割は規則的な予定の確立を助け、仲間や社会生活をもたらし、社会的連帯や支援を与える傾向がある。したがって、この弁護士は仕事を通じて深い達成感や自己実現を得やすいと判断できる。

・キャリア絶頂期における資源の集中

40歳前後で労働者役割帯は最も太く濃くなり、時間的にも心理的にも集中的にコミットしている。この極端な投資が、専門職としての高い成功を支える原動力となる。

b) 犠牲 (ネガティブな側面)

・家庭内役割 (配偶者・親・家人) の圧迫

個人の時間とエネルギー (ライフ・スペース) には限界がある。40代のキャリア絶頂期に労働者役割が極端に太く濃くなることで、それに押し出されるように配偶者・家事担当者・親としての役割帯が細く薄くなる。すなわち、家族と過ごす時間や家庭への感情的コミットメントが犠牲となる。

・「高すぎる代償」による別役割での失敗リスク

Super (1980) は、ある役割での成功が別の役割に好影響を与える可能性を認めつつも、「高すぎる代償を払って得た成功 (success bought at too high a price) は、別の役割における失敗を引き起こす可能性がある (p.287)」と警告している。仕事での成功が家族関係の悪化といった代償を招

くリスクがある。

・配偶者への過度な負担

本事例で本人が仕事に全力投球できる背景には、家庭責任の大部分を担う配偶者の存在が暗黙の前提となりうる。結果として、パートナーのキャリアや自己実現を犠牲にして成立している可能性がある。

c) 結論

献身的な法廷弁護士の人生は、職業的成功という点では華々しいものかもしれない。しかし、Super (1980) は、「ある人の能力や興味が、その人が行っている活動の全体にわたって、無理なく、かつ時間的にも両立可能な形で発揮できる『受け皿』を見いだせるほど、その人はいっそう成功し、満足するようになる (p.287)」という仮説を提示している。ひとつの役割への過剰な投資は、本人の他の役割 (家庭など) を貧困化させるだけでなく、家族にも犠牲を強いる構造となっている可能性がある。

(2) 低関与的な流れ作業型の労働者

①事例の概要

低関与的な流れ作業型の労働者のライフ・キャリアレインボーを図2に示す。本事例は、労働者の裁量の余地が限定的で、単調な反復作業が中心となる労働環境において典型的に見られるライフ・キャリアレインボーのパターンを示している。Super (1980) は原文において alienated assembly-line worker と表現しているが、これは1970年代の大量生産体制下の製造業を背景とした理念型 (ideal type) である。ここで用いられる alienated という語は、労働組織・労働条件の構造的特徴 (裁量の欠如、作業の断片化、反復性、疎外感を生みやすい環境) を指し示すものであり、労働者個人の態度や性格を評価する語ではない。

本稿では、こうした構造的側面を明確化するため、alienated を「低関与的な」と訳出する⁵⁾。すなわち、ここでいう低関与とは、労働者が本来

的に意欲や能力に乏しいという意味ではなく、労働環境の設計が、時間の経過に伴う感情的コミットメントの変化（深化や高揚）を生じにくくしている状態を指す。

②各役割の推移

・子ども (Child) 役割

幼少期から親への依存の中で育つが、感情的な関わり強度は中程度である（中程度の幅で中程度の緑）。20歳以降は親からの心理的独立が進み、役割は細く薄くなる。親が高齢になっても深い感情的関与は生じにくく、最低限の経済的支援や時間的関与にとどまる（やや細く、薄い緑）。60代で親が亡くなり、子ども役割を終える。

・児童・生徒・学生 (Student) 役割

義務教育終了後も、地域の進学・就労準備コースに在籍する。学業への強い情熱や深い関与はなく、「学校に行くもの」として通いつける（中程度の幅／薄いオレンジ）。18歳で学校を終える。

・余暇人 (Leisurite) 役割

児童期から一定の余暇時間は存在するが、18歳で就職して以降も、余暇は常に一定の重要性を持つ（中程度の幅／中程度の紫）。定年退職後は可処分時間が増えるため、余暇に費やす時間は増大し（帯の幅が太くなる）、例えば日常的に近所の喫茶店で過ごすといった行動が定着する。他方で、余暇が自己概念の中心へと劇的に位置づけ直されるわけではなく、感情的関与の水準（色の濃さ）は大きく変化しない（中程度の紫のまま持続）。

・労働者 (Worker) 役割

18歳で地元の工場に就職し、流れ作業のラインに配属される。この日から65歳で引退するまで、労働者役割は時間的にも感情的にもほぼ一定であり、細い帯のまま一定の薄い青（constant light blue, thin band）として描かれる。週40時間、定時出勤・定時退社で仕事を家に持ち帰ることはなく、明確なワークライフ分離が維持される。同

じ幅・同じ薄さの水平線が続くことが、労働条件の構造的特性（裁量の限定、反復性、断片化）がコミットメントの変化を生じにくくしていることを示している。このパターンは労働組織の設計に依存するものであり、労働者個人に固有の特性を示すものではない。

・市民 (Citizen) 役割

選挙への参加は不定期で、地域活動への関与も限定的である（非常に細く、非常に薄い水色）。

・配偶者 (Spouse) 役割

23歳で同じ地域の工場圏で働く女性と結婚し、配偶者役割が始まる（中程度の幅／中程度のピンク）。夫婦関係は親密さを保ちつつも過度に融合的ではなく、一定の距離感を保ちながら生活を共にする。労働者役割が定時就労で安定しているため、夫婦生活も大きな危機や再編を経験しにくく、役割の時間的・感情的関与は生涯を通じて大きく変化しない（中程度の幅／中程度のピンクが持続）。

・家事担当者 (Homemaker) 役割

家庭生活の維持に必要な範囲で家事を担い、配偶者と分担する（やや細く／薄い茶色）。家事は自己実現の中心ではなく、生活維持に必要なルーティンとして処理される。定時就労により家庭内での時間は一定程度確保されるが、家事への感情的関与が高まるわけではなく、役割関与は終始低めで安定している（薄いまま）。子どもの成長に伴い家事負担は質的に変化し得るものの、本人の主観的経験としては「淡々と続く生活作業」であり、図では大きなピークを形成しない。

・親 (Parent) 役割

25歳で第一子が生まれ、親役割が始まる（中程度の幅／中程度の赤）。日常生活の範囲で子どもと過ごす時間は確保され、学校行事等にも参加できる範囲で関与する。ただし、親役割が人生の中心へ肥大化したり、感情的関与が顕著に高まっ

たりする転機は生じにくく、濃度は概ね一定のまま推移する（色の濃さは一定）。子どもの独立とともに役割は徐々に細くなるが、完全に消えるというより「親としての関わりが残る」形で継続する（やや細く／中程度の赤へ）。

・年金生活者（Pensioner）役割

65歳で定年退職し、年金生活者となる。ただしこれは新しい章の開始というより日常の延長として経験され（細く／薄い灰色）、引退後に「年金生活者」としての強いアイデンティティが形成されるわけではない。

③構造的要因の分析

本パターンは、個人の資質ではなく、主として労働条件・労働組織の設計によって生じる。とりわけ以下の要因が、時間経過による関与の深化やピーク形成を生じにくくしている。

- ・ 定時制により、仕事と私生活の境界が明確
- ・ 作業手順が厳格に規定され、労働者の裁量の余地が限定的
- ・ 個人の判断や創意工夫の機会が乏しい
- ・ 同一動作の反復による身体的・精神的負担
- ・ 長年の経験が専門性の蓄積や役割の再編につながりにくい

④このパターンの特徴

本パターンは、「低関与」という語から想起されがちな主観的幸福の低さを必ずしも意味しない。むしろ、労働者役割が人生の中心へ肥大化しないことで、家族・余暇・生活の安定といった他領域によって満足が成立し得る点に特徴がある。

a) 利点（ポジティブな側面）

・明確なワークライフバランスの維持

本事例では労働者役割への感情的関与が終始低く、図式上は「一定して薄い青」で表現される。仕事を家庭に持ち帰ることがなく、定時就労による明確なワークライフ分離が生涯にわたって維持

される。Super（1980）は、ある役割への過剰投資が他の役割を圧迫するリスクを示唆しているが、本事例ではそのような役割間の競合が生じにくい。

・複数役割への安定的な投資

労働者役割が人生の中心へと肥大化しないことで、家族・余暇・生活の安定といった他の役割に、生涯を通じて一定の時間とエネルギーを継続的に投資できる。仕事の繁忙に翻弄されることなく予測可能な生活リズムが維持されるため、配偶者・親・余暇人としての役割帯がほぼ一定の幅と濃さで持続する。

b) 犠牲（ネガティブな側面）

・労働者役割を通じた自己実現の機会の限定

Super（1980）は先行研究を踏まえ、仕事役割が生活を構造化し、それに意味を与えること（p.288）を指摘している。しかし本事例では、作業の断片化・反復性・裁量の欠如という労働条件の構造的特性により、仕事を通じた深い達成感や自己実現が生じにくい状態が継続する。図式上、労働者役割の色の濃さが発達的に変化しないことはこの状態を端的に示している。

・専門的スキルの蓄積とキャリア発展の経路が見えにくい

長年の経験が専門性の深化や役割の再編につながりにくい労働条件のもとでは、キャリア絶頂期に相当するような「最も太く濃くなる時期」が生じない。したがって、仕事を通じた社会的地位の向上や、スキル活用による高い達成感を得る機会は構造的に限定される。

c) 結論

低関与的な流れ作業型の労働者の人生は、職業的達成という点では際立つものではないかもしれない。しかし、Super（1980）が、能力や興味を複数の活動にわたって無理なく両立的に発揮できるほど満足度が高まると論じていることに照らせ

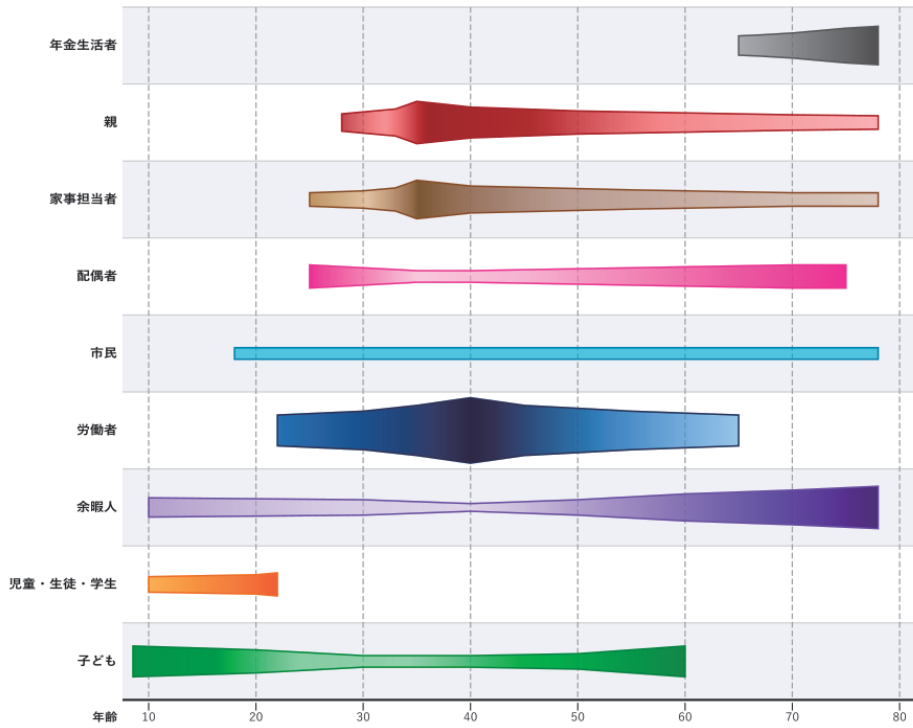


図1 献身的な法廷弁護士のリフ・キャリアレインボー

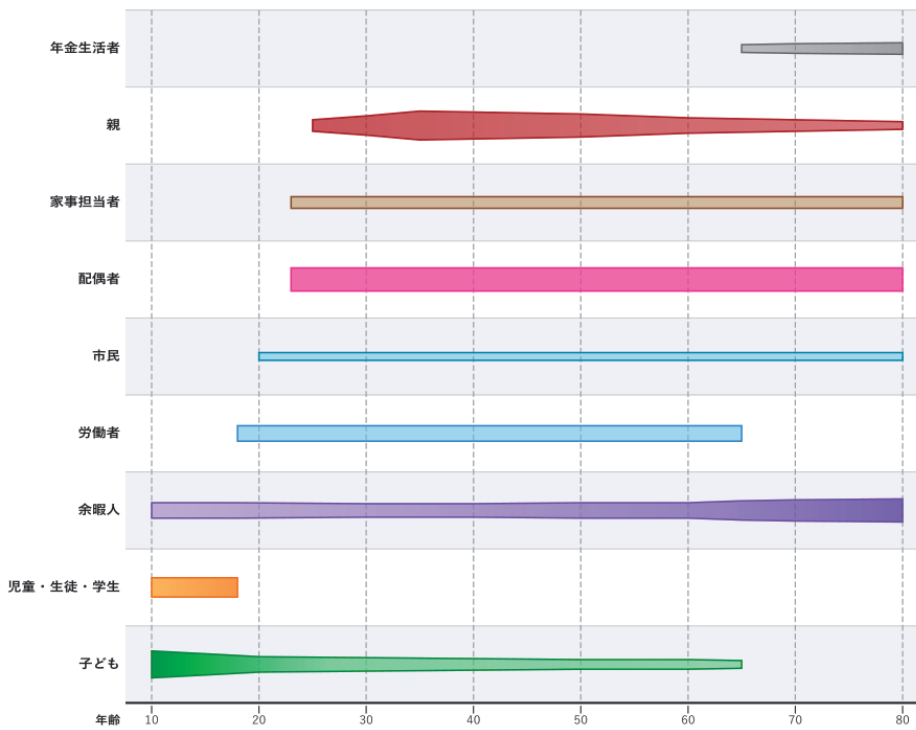


図2 低関与的な流れ作業型の労働者のライフ・キャリアレインボー

ば、このパターンは別の側面から評価される余地がある。労働者役割が人生全体を席卷しないことで、家族・余暇・生活の安定という複数の役割が並存し、生活全体として見れば一定の調和が保たれている。

ただし重要なのは、この調和が「深い感情的関与が広く分散している」ことによってではなく、「いずれの役割にも強いピークが生じにくい」という異なる理由によって成立している点である。すなわち、役割間の競合は回避されているが、Super (1980) が理想とした「自己を各役割を通じて表現する」という意味での充実とは、構造的に異なる状態にある。この差異を個人の意欲や能力の問題に帰するのではなく、労働条件の設計がもたらす構造的帰結として理解することが、批判的継承の核心である。

5 対比分析

(1) 役割投資パターンの構造的差異

献身的な法廷弁護士と低関与的な流れ作業型の労働者における役割投資パターンの構造的差異を表1に示す。

この表から読み取れる最も本質的な差異は、献

身的な法廷弁護士における役割投資パターンの動態性と、低関与的な流れ作業型の労働者における役割投資パターンの安定性の対比である。献身的な法廷弁護士は生涯を通じて「仕事が家庭を圧迫する時期」と「家庭役割が回帰する時期」という明確なフェーズを持つのに対し、低関与的な流れ作業型の労働者はいずれの役割においても顕著なピークや転換点を持たない。

重要なのは、これらの差異が個人の性格や意欲に由来するのではなく、労働条件・職務設計という構造的要因に強く規定されているという点である。なお、どちらのパターンが「より良い人生」を示すかという価値判断は、本稿の射程外であることを改めて確認しておく。

(2) 時間的投資と感情的投資の関係

この2つの事例の根本的な差異は、時間的投資と感情的投資の連動に現れている。

献身的な法廷弁護士の事例では、仕事への時間投資の増大と感情的コミットメントの深化が連動して推移している。キャリアの発展とともに労働者役割の帯が太くなるのと並行して、色の濃さも増している。そして、労働者役割への集中的な投資は、他の役割との間に競合を生んでいる。仕事

表1 2つの事例における役割投資パターンの比較

	献身的な法廷弁護士	低関与的な流れ作業型の労働者
労働者役割の帯幅	動的に変化 (細→太→細)	変化なし (幅が一定)
労働者役割の色の濃さ	動的に変化 (fairly dark → still darker → slowly lighter)	終始変化なし (constant light blue)
他の役割への影響	大きい (仕事が家庭役割を圧迫)	小さい (役割間に明確な境界)
キャリア絶頂期の有無	明確 (40歳前後)	なし (水平線が持続)
役割間の相互作用	激しい (葛藤と波及効果)	穏やか (役割が分離されている)
ワークとライフの両立	不均衡 (仕事優位の時期が存在)	安定 (一貫したバランスが持続)
引退後の変化	劇的 (余暇が開花し、家族役割が回帰)	最小限 (日常の延長として継続)
人生の物語性	起承転結がある (上昇・絶頂・下降)	平坦で変化が少ない (水平線的)

に費やす時間と感情的エネルギーが増大するにつれて、配偶者・親・余暇人としての役割が時間的にも感情的にも圧迫されている。Super (1980) が指摘した役割間のスピルオーバー効果 (spillover effect) は、献身的な法廷弁護士の事例において最も顕著に現れている。仕事の成功と充実が家庭生活の豊かさをもたらす一方、仕事への過剰投資は家族関係の劣化という代償を招くリスクをはらむ。

一方、低関与的な流れ作業型の労働者の事例では、時間的投資と感情的投資が乖離している。週40時間という一定の時間を仕事に費やしているにもかかわらず、感情的コミットメントは「constant light blue」として終始変化しない。この乖離は、仕事に長い時間を費やすことが、必ずしも深い感情的関与をもたらすわけではないことを示している。さらに重要なのは、労働者役割が感情的に低関与であるがゆえに、他の役割へのスピルオーバーが生じにくいという点である。仕事の不満や充実感が家庭生活や余暇に持ち込まれることは相対的に少なく、定時就労による明確なワークライフ分離が維持されやすい。

この2つの事例の差異は、Super (1980) が二次元モデルによって可視化しようとした核心的な問いに直接応答する。時間的重要性 (帯の幅) だけを見れば、献身的な法廷弁護士も低関与的な流れ作業型の労働者も労働者役割に相当の時間を費やしているように見える。しかし感情的関与 (色の濃さ) を加えて初めて、両者の本質的な差異が浮かび上がる。

6 考察：理念型の比較から得られる知見と批判的継承

(1) 二次元可視化の意義：理論と実装の乖離から

Super (1980) のライフ・キャリアレインボーが持つ特徴は、キャリアを生涯にわたる複数役割の統合として捉え直した点にある。さらに、各役割への投資を時間的重要性と感情的関与という二

次元で測定しようとしたことにより、後のキャリア研究においても参照され続ける枠組みを提示した。

しかしここで注目すべきは、Super 自身が感情的関与の色の濃淡による表現を「カラーであれば示せたであろう」と述べるにとどまり、論文内での実装を断念した点である。1980年当時の印刷・出版環境においてカラー印刷はコスト上の制約が大きく、理論的に構想された二次元の可視化は、技術的・経済的条件により限定的であった。

現代の技術では、Super (1980) が断念せざるを得なかった表現を実現可能となった。本稿で用いた2つの事例の図は、帯の幅 (時間的重要性) と色のグラデーション (感情的関与) の両方を同一の図面上に表現した。これは Super (1980) がもともと思い描いていた構想を40年以上経過した現代において初めて視覚的に完成させる試みともいえる。

2つの事例の比較が明確に示すのは、労働者役割に費やす時間量 (帯の幅) が長期にわたりほぼ同等であるにもかかわらず、感情的関与 (色の濃さ) が全く異なりうるという命題、すなわち「時間は意味と等価ではない」という洞察である。この命題こそが、Super (1980) の二次元モデルが生み出す本質的な問いであり、デジタル可視化によって初めて直観的に確認できるようになった知見である。

(2) 2つの事例の比較から導かれる知見：役割間連関の非対称性

献身的な法廷弁護士と低関与的な流れ作業型の労働者という2つの事例の対比は、役割投資の構造的差異を鮮明にする。前者ではキャリア絶頂期の労働者役割が最も太く最も濃くなり、それに押し出されるように配偶者・親・家事担当者の各役割が細く薄くなる。後者では全役割がほぼ中程度の水平線として並存し、明確なピークも谷も持たない。

この対比が示す重要な理論的含意は、役割間の連関の非対称性である。献身的な法廷弁護士の事

例は「達成と犠牲の非対称性」を示す。高い感情的関与を伴う労働者役割の肥大化は、他の役割を時間的にも感情的にも圧迫する。Super (1980) が「高すぎる代償を払った成功は、別の役割における失敗を引き起こす可能性がある」と警告したのは、まさにこの構造を指している。一方、低関与的な流れ作業型の労働者の事例は「安定と限定性の非対称性」を示す。労働者役割が人生の中心に肥大化しないことで、他の役割との時間的競合が生じにくく、家族・余暇・生活の安定が相対的に確保されやすい。しかしその代償として、労働者役割を通じた深い自己実現の機会は限定的となる。

Super (1980) は、能力や興味を活動全体にわたって無理なく両立的に発揮できる場を見いだせるほど、満足度が高まるという仮説を提示していた。この仮説に照らせば、献身的な法廷弁護士のパターンは複数の役割における時間的に両立可能で調和的な投資パターンからは乖離している。一方、低関与的な流れ作業型の労働者のパターンは、労働者役割に過度な投資をせずに役割の並存状態を維持するという意味で、Super (1980) の仮説に沿う側面を持つ。しかしそれは、感情的関与が広く分散しているからではなく、いずれの役割にも深い関与が生じにくいという異なる理由による。

(3) 原典事例の批判的継承

Super (1980) が提示した2つの事例は、その分析的明瞭さゆえに強い説得力を持つ一方で、現代の視点からは複数の点で批判的再検討を要する。

第一は構造的要因の明示化である。原典では「献身的な (devoted)」「疎外された (alienated)」という語が用いられているが、これらは個人属性の記述として読まれるリスクを孕む。本稿が繰り返し強調してきたように、感情的コミットメントの差異は、個人の性格や意欲ではなく、労働条件・職務設計・裁量の有無という構造的特性に強く依存する。高度な自律性・スキル活用機会・社会的

意義の明確性が感情的関与を高める条件を生み出す一方、作業の断片化・反復性・裁量の欠如は感情的コミットメントの発達の变化を生じにくくする。個人を分類する語ではなく、労働条件を記述する語として原典事例を読み替えることが、理論の批判的継承において不可欠である。

第二はジェンダー的構造への自覚である。献身的な法廷弁護士のパターンが成立するためには、家庭責任の大部分を担うパートナーの存在が暗黙の前提となっている。1980年当時の家族規範と専門職の性別構成を反映したこの前提は、現代においてそのまま適用できるとは限らない。本人が仕事に全力投球できる背景に、配偶者のキャリアや自己実現が犠牲になって成立するという点を可視化することもまた、ライフ・キャリアレインボーの潜在的な分析機能として活用されるべきである。

第三は労働者の主体性の再評価である。構造的制約を強調することは、個人を構造の受動的な産物として捉えるリスクを伴う。しかし人は、与えられた条件の中で意味を見出し、役割を形成し、将来を構想する能動的な存在でもある。構造的条件は感情的関与の形成に強く影響するが、それを一元的に決定するわけではない。この主体性への視座は、キャリアカウンセリング実践において特に重要であり、クライアントの能動性を支援する理論的基盤として機能する。

(4) 実践への示唆

理論的再定義に先立ち、Super (1980) が論文末尾で明示した実践的応用の構想を確認しておく必要がある。Super (1980) はライフ・キャリアレインボーの主要な用途として教育的活用とカウンセリング的活用の二つを挙げている。

前者は、ライフステージ・ライフスペース・ライフスタイルという概念を教授し、キャリアを構成する多様な役割の相互連関的な性格を理解させ、複数の役割の組み合わせによって自己実現がいかに達成されるかを示すことである。後者は、青年後期および成人を対象とするカウンセリング

補助ツールとしての活用であり、(a) 現在に至るまでの自身のキャリアを分析すること、および(b) これまでの発達の延長としての将来、あるいは計画によって可能となる将来へと投影することの二方向から機能する。

Super (1980) は白紙のレインボーを用いて過去から現在までの役割の開始時期や時間的要求の変化を帯として書き込む作業が、将来のキャリア(役割の組み合わせ)を投影・計画するツールとしても応用できるとしている。この実践報告は本稿の議論に二つの重要な含意を与える。

第一に、ライフ・キャリアレインボーは最初から参加型・自己記述型のツールとして構想されていたという点である。「白紙のレインボー」に自ら記入するという行為は、個人が自らのキャリアを客体として観察しつつ、将来の役割配分を能動的に構想する機会を提供する。構造的制約の中にあっても、将来への投影という行為を通じて個人の能動性が喚起される場として、この手法は機能しうる。

第二に、色の濃淡による感情的関与の視覚化が実装された今日において、「白紙のレインボー」もまた二次元で記入できるという点である。時間的要求のみならず感情的関与の現状と将来予測を同時に可視化することで、カウンセリング場面における対話の精度と深度が高まることが期待される。クライアントが描いた帯の幅(時間)と色の濃淡(感情)の組み合わせは、言語化されにくい内的経験の外在化を促し、キャリアカウンセラーとの対話の出発点となりうる。

(5) 総括——分析装置としてのライフ・キャリアレインボー

本稿の分析を通じて明らかになったのは、Super のライフ・キャリアレインボーが単なる発達モデル——個人がいかにキャリアを発達させるかを記述する図式——にとどまらないということである。より正確には、これは「役割投資の構造とその社会的制約を可視化する分析装置」として機能しうる。

時間的・感情的投資の二次元測定は、個人が「どこに自己を投じているか」を可視化するだけでなく、「なぜその配分になっているのか」という構造的問いを喚起する。役割投資パターンの4類型は、個人を診断するためではなく、役割間の連関と相互影響を分析するための視点を提供する。そして労働条件という構造的要因が個人の役割形成に与える影響の可視化は、個人のキャリア選択を「自由な個人の決断」として矮小化することなく、社会構造との相互作用として理解するための理論的基盤となる。

ここで Super (1980) が示した応用の方向性である「過去の分析と将来への投影」という双方向性を想起するならば、この分析装置は静態的な記述ツールではなく、過去・現在・将来を貫く動態的な自己理解と計画の媒介として機能することが分かる。

デジタル技術が感情的関与の視覚化を可能にした今日、求められるのは技術的実装の完成にとどまらない。適用においては、個人の多様性と構造的要因の両方を考慮した視座が不可欠である。

最終的な留保として強調しておきたいのは、本稿で検討した二つのパターンは、あくまで分析的目的のための理念型であり、個々の労働者を分類・評価・診断するためのツールではないという点である。現実の個人は、人生の段階、家庭状況、組織文化、社会的文脈、個人的価値観などにより、これらのパターン間を移行したり、独自の組み合わせを創造したりする。キャリア研究者およびカウンセラーは、この視覚化手法を用いる際、常にこうした多様性と個性を尊重する必要がある。

注

- 1) 原文では“alienated assembly-line worker”と表現されているが、“alienated”という語が個人属性を示唆するリスクを避けるため、本稿では「低関与的な」と訳出する。これは労働条件の構造的特性が感情的関与を困難にしている状況を指すものであり、労働者個人の性格や態度を評価するものではないことによる。

- 2) Super (1980) は、ほんやり過ごすことも含め、余暇時間の活動を追求している人の立場や役割を表す標準的な用語がないために "Leisureite" という語を用いたと説明している。
- 3) 法廷弁護士 (barrister) は、1980 年当時のイギリスにおける典型的な高度専門職の一例として選択されたものであり、この職業に固有の現象のみを示すものではない。
- 4) 親の介護による役割回帰の程度は、家族規範や介護制度など、文化的・社会的文脈に依存する。たとえば家族介護が規範化されている社会(日本など)と、公的介護が整備された社会(北欧諸国など)

では、子ども役割の再強化の程度が異なる可能性がある。

- 5) 同じ流れ作業であっても、チームワークに喜びを見出す人、改善提案に情熱を持つ人、熟練の蓄積により仕事へのコミットメントを高める人など、個人差は大きい。本稿が扱うのは、特定の個人像ではなく、労働条件の理念型としてのパターンである。

引用文献

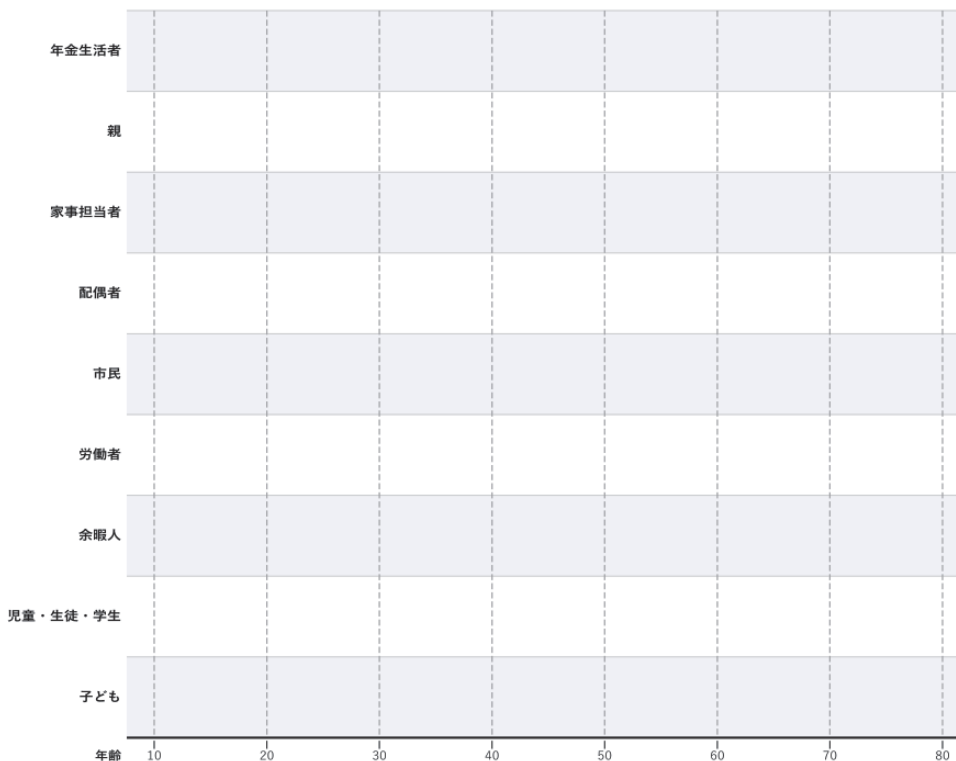
Super, D. E. (1980) . A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, 16 (3) , 282-298.

付録：白紙のライフ・キャリアレインボー（ワークシート）

各役割の帯を自由に書き込むことができる白紙のワークシートである。帯の幅は時間的重要性（その役割に費やす時間の量）を、色の濃淡は感情的関与（その役割への心理的コミットメントの深さ）を表す。現在までの自身のキャリアを振り返る用途と、将来の役割配分を構想する用途の双方に活用できる。

ライフ・キャリア・レインボー（ワークシート／白紙）

※ 帯の「幅＝時間的重要性」「濃淡＝感情的関与」として、色鉛筆等で記入してください。



Temporal Importance and Emotional Involvement in Super's Life-Career Rainbow: A Visual and Critical Reconstruction

TAZAWA Minoru

Super's (1980) life-span, life-space approach to career development introduced the Life-Career Rainbow as a visualization tool representing role importance across two dimensions: temporal importance (bandwidth) and emotional involvement (depth of color). However, Super himself acknowledged that the emotional involvement dimension could not be fully implemented graphically "for reasons of economy." This paper revisits two contrasting ideal types presented by Super—the committed barrister and the alienated assembly-line worker—through a critical and constructive reinterpretation. Drawing on Super's two-dimensional framework, this paper independently derives a four-quadrant typology of role investment patterns by combining high/low temporal importance with high/low emotional involvement. Using digitally reproduced Life-Career Rainbow charts that realize Super's original vision for the first time, the paper demonstrates that equivalent temporal demands in the worker role can yield fundamentally different life-styles depending on emotional involvement. The comparative analysis reveals that differences in emotional commitment reflect situational determinants—such as structural conditions of labor—rather than just personal determinants. The paper

further addresses the gendered assumptions embedded in the committed professional pattern and reasserts the role of the individual as the synthesizer of personal and situational determinants. Finally, the paper proposes extending Super's "blank" Life-Career Rainbows into a two-dimensional self-description format for use in career education and counseling.